

中間評価	
○ 成果と▽ 課題	● ▼ 期末への方策等
【第1学年】 ○8割の児童はひらがなや数字を正しく書く力を身に付けた。 ○数に対する理解を確実に算数は苦手意識が低い。 ○タブレット端末の基本操作はとても上手で、プログラミング、写真を撮る、作品を作る、意見を入れるなど、できることが増えた。 ▽鉛筆の持ち方が独自のものになっている児童が多い。また、学習中の姿勢などが崩れがちな児童が多い。 ▽授業中、自分の考えを発表できる児童は半数であり、決まった児童の発言で進みがちになる。	●漢字の学習が始まり、学習時間・機会の確実な確保が必要である。 ●繰り上がり、繰り下がりなどの思考をブロックの具体物や図などの半具体物を活用して進める。 ●漢字や計算でデジタルドリルを十分活用する。 ●タブレット端末の基本的な操作方法や管理方法の習得の場面を設定する。 ▼姿勢保持などの基本的な学習を受ける態度について声を掛け、意識させる。 ▼発表の機会の確保と方法の充実を図る。
【第2学年】 ○話し合いや発表などで、話型を提示したり話す人、聞く人の注意を確認したりして、少しずつ定着している。 ○一行日記、絵日記や作文など書く場面をできるだけ多くして、少しずつ書くことに慣れてきた。 ○漢字は毎日宿題に出し、継続することで書くことができるようになってきた。 ▽漢字など文字を書くこと、計算することに個人差がかなり見られ、個別指導する時間があまりとれない。	●引き続き書く機会をできるだけとって、文字や文章を書くことへの抵抗を減らしていく。読書の機会もできるだけとり、読むことと書くことを両立させていく。書くことが難しい子は、個別対応を考えていく。 ▼計算の答えが正確にはやく出せるように、時間はかかったり、タブレットを活用したりしていく。 ▼補習など個別指導する機会を作る。
【第3学年】 ○「ひがと学びスタンダード」を活用して、基本的な話の聞き方を繰り返し指導した結果、少しずつ話の聞き方が上手になってきた。 ○漢字が苦手な児童でも、デジタルドリルと紙ドリルを併用した結果、楽しく学ぶことができた。 ○算数では、児童同士が考えを交流する時間の設定や解決の見通しをもたせるための視覚的支援を行った結果、すすんで課題解決に取り組む児童が増えた。 ▽式による表現について理解できていない児童や基本的な知識・技能の定着が十分ではない児童	●引き続き「ひがと学びスタンダード」を活用して話の聞き方や話しの仕方を繰り返し指導し、学び方の基本ができるようにする。 ▼漢字を楽しく学んでいる一方で、きちんと定着している児童が少ないため、小テストの回数を増やしたり、デジタルドリルの進捗具合を確認して課題を設定したりして定着を図る。 ▼友達との交流の時間に相手の式を参考にしたり、ペアで発表したり、ミニ先生を設定して教え合っ

も多い。

【第4学年】

- 学習に苦手意識のある児童も、デジタルドリルを活用することで少しずつ定着できている。
- 発表する機会を増やして経験を積んだことで、自信をもって発言できる児童が増えてきた。友達のよい発表を参考に、次の学習の意欲をもつこともできている。
- 話し合いや意見交流の場を多く設けたことで、自分の考えや思いを、分かりやすく伝えられるようになってきた。
- タイピング練習を継続して行ったことで、タイピングの速度が上がり、スムーズな学習へとつながった。タブレットを活用して共同編集するなど、学習の幅も広がっている。

▽かけ算や繰り上がり・繰り下がり の習得が不十分で、わり算でつまずき、自信をなくしてしまう児童がみられる。

▽学習定着度の差が広がってきている。

【第5学年】

- 週に1回以上、読み聞かせをした。本に触れる機会を増やしたことで、自発的に読書をする児童が増えた。
- 毎日、計算技能を身に付けるための計算スキルやデジタルドリルの課題を出したことによって、小数のわり算やかけ算の技能が身に付いてきた。
- 個に応じた学習内容を選択できるようにしたことで、文章問題を苦手とする児童も文章を読む習慣が身に付いてきたように感じる。

▽国語や外国語の学習で辞書や英和辞典を使用した。しかし辞書の使い方が身に付いていない児童がいたり、インターネット上にある正しいのか分からない情報を活用していたりすることがある。

【第6学年】

- デジタルドリルを活用する機会を多く作れている。
- 数直線や図等に表し、解決させる指導を繰り返

たりして、定着を図る。

- デジタルドリルと紙ドリルを効果的に併用し、楽しく学べる環境を整えていく。
- 引き続き、学習のゴールをしっかりと提示し、活動の目的・見通しをもたせていく。
- 今後も発表の機会の確保・充実を意識していくと共に、学級会の経験も着実に積み重ねていく。
- タブレットの活用のルールが徹底されていないと、共同編集はもめごとにつながる。ICTの上手な使い方や約束事を、引き続き指導していく。

▼デジタルドリルを活用して個別に苦手を復習し、着実に学びが積み上がっていくようにする。自分の苦手を把握するためにも、毎時間の振り返りを着実にやっていく。

- 落ち着いて読書ができるように環境を整える。
- 家庭学習でのデジタルドリルを継続して活用する。
- 個に応じた学習ができるように時間を確保していく。
- ▼学習の振り返りを丁寧にとすることと、情報モラル教育の充実を図る。

- 家庭学習でのデジタルドリルを継続して活用する。
- 本に親しむ活動を今後も取り入れ、語彙を増や

し行うことで、定着が見られた。 ○読書の機会を増やし、興味を高めた児童が見られた。 ▽学習の定着度を把握する機会が少なく、復習の時間を十分に取ることができずに次の単元に進むことが多い。 【若草学級】 ○ICT 機器の機能や紙などを児童の実態に合わせて使用することにより、学習に積極的に取り組む姿が見られた。 ○行事を軸に、時刻を求めたり文章を読み取ったりすることで、実際に校外学習などで見通しをもって取り組めた。また、自らしおりを確認する児童も増えた。 ○教員が使っている手話を真似して相手に話そうとしたり、相手に合わせた話し方を選んだりする姿が見られた。 ▽学習の定着度に個人差が大幅にあり、単元が長くなったり、定着する前に次の単元へと進んでしまったりすることがある。 ▽相手の意見を受け入れたり、会話をしようとしたりすることが難しい。	す。 ▼単元終了時にデジタルドリルを活用して定着度を確認し、個にあった指導をする。 ●児童の特性を生かし、教材の検討と精査を引き続き行っていく。 ●児童が身近に感じるものを学習に取り入れ、活用する場面を計画的に考えて授業の構成をしている。 ●引き続き、日常的に手話や多様なコミュニケーションを扱っていく。 ▼学習が身近にできるよう、ドリルパークをより活用し、計算や漢字、ひらがなやカタカナの定着を図る。 ▼「話す」だけでなく、相手の話を聞く時のポイントを指導、支援していく。
---	--